

20世紀後半における文学基盤の 変化の指標について

山 中 光 一

要 旨 「明治期における文学基盤の変化の指標について」(国文学研究資料館紀要6号, 1980年) および「20世紀前半における文学基盤の変化の指標について」(同上8号, 1982年) に続いて, 20世紀後半における, 文学に影響を与える社会的「場」の変化を論ずるものである。

すなわち, この期間において, 文学を担う作家および読者を構成する集団は, 戦前に教育を受け戦争体験をもつ「戦前基盤」と, 戦後の教育を受け戦争のない社会に育った「戦後基盤」との二つの基盤から成り, 前者はさらに戦前の知識層と中間層の二重構造を受けついで全体として三成分構造になっている。そして各基盤で言語改革やメディアの発展の受け入れ方も異り, それらの影響は各基盤の消長によって変化した。「戦前基盤」は戦後その二重構造のギャップが狭められ, 融合拡大した基盤となるが, 1970年頃から失われ, 文学の基盤は, それとは異質の戦後基盤に移ってゆくことを明らかにし, この基盤の変化と, 戦後文学史との関係も考察する。

1. はじめに

本稿は、文学に作用する時代状況が、20世紀後半から現在（1984年）にいたるまでにおいて、どのように変化し、また変化しつつあるかを大局的に論ずるもので、既に発表した以下の二つの論文につづくものである。すなわち、「明治期における文学基盤の変化の指標について」（国文学研究資料館紀要第6号、1980年——以下〔1〕として引用）

および、

「20世紀前半における文学基盤の変化の指標について」（国文学研究資料館紀要第8号、1982年——以下〔2〕として引用）

今回はいわゆる戦後の時代を主として扱うもので、これらにより日本の近代の文学基盤の変化の大筋を把握するのが意図である。

〔1〕では近代文学の出発点における二葉亭四迷の例について、個々の作品をも、個別の作家をも超える「時代状況」の場というものが、文学に作用を及ぼしていることを確認し、その「場」を客観的に記述する方法として、文学事象を構成する基本要素である「作家」と「読者層」と、それら両者をつなぐ「言葉」と「出版などのメディア」の四つの要素を挙げ、その内「作家」を除く後の三要素を、作家の外側の社会的要素として捉え、その時間的に変化する成分を調べることをまず一般的に論じた。その一般の方針に沿って〔1〕ではさらに明治期のそれらの要素の時間的変化を具体的データにもとづいて調べ、それらがいずれも

(1) 明治20年までは近世のレベルの延長上にある

(2) 明治40年には新しい近代のレベルに達する

(3) 明治20年から40年までの20年間は、両者を結ぶS型成長曲線によって遷移する、

ということを確認し、このことは二葉亭四迷が、明治20年の『浮雲』で近代小説に出発しながら、それを中断し、一時はもっぱら翻訳に移り、外国の舞台を借りる過渡期を通して、言文一致普通文が確立し、自然主義の小説が開花する明治40年に再び小説『其面影』を書いたことなど、文学的事象とも合致することを示した。

〔2〕では〔1〕に続いて、ほぼ終戦までの半世紀の文学基盤の変化を調べ、それが大きく二つの階層に別れ、それぞれの階層によって別の変化を示す二重構造となったことを明らかにした。すなわち、第一は加速度的に拡大する前期

中等教育（旧高等小学卒レベル）を受けた中間層を基盤とし、当時の音声、映像等のメディアの発達と結びついた「大衆文化の場」であり、それは20世紀の年数を t としたとき t の2乗と3乗を結合した

$$f(t) = 0.85 \left(\frac{t}{10} \right)^2 + 0.15 \left(\frac{t}{10} \right)^3, \quad 0 < t \leq 47$$

を指標として成長したこと、それが新聞や大衆誌の読者の拡大のデータからも裏付けられることが示された。第二は近代化の一サイクルを終って、ほぼ人口の増加程度の増加という安定状態にはいった知識層を基盤とし、安定した文字メディアと結びついた「文壇の場」であり、その変化の指標は、量的成長はほとんどなく——最後の戦時中の技術系の拡大を除いて——もっぱら新旧の交替による質的代謝を示すものであった。

今回は20世紀後半という上記に続く半世紀を視野に置くが、現時点（1984年）はまだその三分の二を経た途上に過ぎない。しかしなおえて20世紀後半という50年のレンジを視野に置くのは、[2]の「はじめに」でも述べたように、作品論や作家論のレベルを超えて、歴史の変化をあたかも地球の曲率を測るようにマクロの手法で把握するためには、一人の作家の全活動生涯をカバーするような、少くとも50年以上の期間を視野に置くことが必要であるからである。またその区分の仕方も、あえて西暦で機械的に区分したのも、あたかも緯度、経度で機械的に区切った地図の中に地勢を画き出し、分水嶺がどこにあるかをその内容として示すように、時代を区分すべき場の変化をその中の記述によって明らかにしようと意図しているからである。

もちろんこの50年の期間の内、データは現在までの三分の二についてしか得られない。しかしそれだけでもこの期間の状況についてかなりのことが把握できるし、また今後の三分の一の期間についても、——当然不確定要素を含むとしても——或る程度の予測を可能としている。そこで2000年へ向けての今後の期間の変化の予測についても若干言及した。文学の研究においては、評価の定まらない同時代が扱われることは稀であり、まして将来の予測が扱われることはほとんどない。しかし他の学問分野では予測は別に珍しいことではなく、古くは日蝕の予測を始め、最近では地震・津波の予知予報は学問としても社会的にも重要な課題である。もちろん文学基盤の変化の予測は、予言でもなく、そのように変化させようという計画でもないことは当然であるが、念のため、ここで行う予測の意味について（付）で若干コメントした。

以下、本稿では、

2節で、文学の担い手となる作家および読者について、再びその教育段階に

よるアプローチに沿って、教養と知識装備から見た階層分析を行ない、2-1ではこの期間の文学の基盤が、戦前からの二重構造と、さらに戦後の新教育のもとに育った新しい基盤との三つの構成要素から成ることを明らかにし、2-2でそれぞれの基盤の時間的消長を追う。

3節では、言語の改革とメディアの目覚ましい発展を含むこの期間の社会の大きな変化が、それぞれの基盤の上の文学の場に、どのような変化をもたらしたかを考察し、

4節では、戦後も30年を経てようやく文学史として扱えられるようになった「戦後文学史」の位置づけと、ここで検討してきた文学の基盤の変化との関係を考える。

そして5節では「むすび」として本稿の考察の結果を要約するとともに [1]、[2] および本稿を通して明治以来今日まで、さらに今世紀の終わりまでの近代日本文学の基盤の変化の全体を要約する。

2. 文学の担い手の変動

2-1 文学の担い手の構成

文学作品が作家によって創られることは当然であるが、文学を担っているのは作家だけでなく、それを享受する読者をも含む集団である。1983年9月東京で開かれた第31回国際東洋学会議（CISHAAN）の「文学の伝統と変容」部会の基調講演において安部公房氏は、「文学の伝統は、決して師弟相伝によって作家から作家へ伝えられるようなものではなく、それを受け継ぐ民衆全体によって伝統として担われて来たものである。とりわけ近代にはそうである。」という趣旨の指摘をされた。当然のことであるが日本文学は日本人々により、英米の文学は英米の、中国文学は中国の人々によってそれぞれ担われてきたのであり、そのことはまた逆に、それら文学を担う人々のバックグラウンドの文化と、それを伝える言語やメディアの相違によって、担われる文学も自らその性格を反映してそれぞれ異なる個性を示し、時代につれて変容をとげてきたのである。このことは同じ日本文学の内部についても同様であって、[1]で述べたように、明治期において西洋の近代的教養を身につけた担い手達の集団としての蓄積、成長によって、また言文一致普通文の開発、活版印刷の進展にもなって、近世文学から近代文学への遷移変容が達せられたのであった。また、20世紀前半においても、[2]で述べたように、いわゆる「横文字」を読んで西洋の近代的教養を身につけた極く一部の知識層と、外とは切り離された

「国民教育」のもとに育った中間層の拡大とによって作り出された担い手の二重構造を反映して、文学においても文壇の文学と、大衆文学という異なる文学が成立した。このことはそれらの拡大の傾向が、それぞれの基盤の拡大の傾向と一致することで確かめられている。

では20世紀後半の戦後には、それら文学の担い手の状況はどのように変化して来ているであろうか。

教育勅語を中心とする戦前の教育によって身につけたものと、教育以上にいや応なく体験せざるを得なかった戦争、それに続く敗戦、さらに異民族外国軍隊による被占領（以下これら戦後体験も一括して「戦争体験」と呼ぶことにする）は、当時の国民に刻まれた未曾有の共通体験であった。この「戦争体験」はこれを共有する者にとっては、文字通り生死にかかわり、人生のすべてを左右するような決定的な要素であり、したがって身につけた教養の原点ともいべきものである。しかし一方この「戦争体験」を持たない、いわゆる戦争を知らない世代の人々にとっては、それは単に今知らないだけでなく、今後も身につけることはまず考えられないものである。文学が人間の生き方や、その考え方に深くかかわらざるを得ないものとするれば、この「戦争体験」の有無は、学歴や職業によって身につけるもの以上に、あたかも民族の違いのように文学の担い手の教養や考え方を特徴づけるものと考えることができよう。戦後しばらくして高度成長の時代の頃、しばしば前者に属する年輩の人が、「今の若者と語るのは、日本語のわかる外国人と語るようだ」と感想をもらしていたのも首肯することである。

この「戦争体験」の有無によって、戦後の文学の担い手は基本的に二つの構成部分に分けられる。

前者は、「戦争体験」をもつのであるから、当然に戦前、あるいは「戦争体験」の中で人間形成を行った人々であって、それは構成員としては〔2〕で既に述べた20世紀前半に形成された戦前の知識層（以下旧知識層と呼ぶ）、および戦前加速度的に拡大した中間層（旧中間層と呼ぶ）の人々にはかならない。

この二つの階層は、「戦争体験」を共有することでは共通しているが、文学を担う基盤としては、戦前の旧知識層と、旧中間層のギャップはあまりにも大きく、とりわけ戦後社会の一つの指導原理となった西洋的近代への距離において全く異っていたから、次第にそのギャップは埋められる方向へ進んだとしても、少くとも戦後の当初においてはなおこの二つの層は文学を担う二つの別の基盤として考えることができる。

一方、後者すなわち「戦争体験」を持たない人々は、その構成員はほぼいわ

ゆる六三制の新教育のもとで、戦後の社会の中で人間形成を行った人々である。これらの人々も、当然その内部には、男女の差はもちろん、中学卒、高校卒、短大卒、大学卒という教育レベルの差、職業や所得階層にもとづく差などさまざまな相異があり、多様化は一層進んでいる面もある。しかし、文学の担い手として、文学を受け入れる前提としての知識装備や教養の質から見て、戦前の知識層と中間層のような決定的な差異はない。教育は単線型で深さや広さに差はあっても原理を異にするものではなく、男女も同権、共学である。また西洋に対する知識においても、かつてエリートだけが主として「横文字」の書物を通じて触れることができたのに対し、戦後は外国の労働者や農民出身のG.Iが大量にトータルなその文化を持ち込んできたし、高度成長以降は日本の女性や農民たちの海外体験すらめづらしくない状態となった。またテレビなど情報メディアの発達もギャップを埋める効果が大きい。その結果、これらの人々は均一ではないが、幅広く切れ目なく分布する一つの集団としてしか扱えられないものとなったと思われる。

したがって結局 20 世紀後半の戦後の時代の文学を担う基盤は、その基本的な特性に注目して、次の三つの基盤によって構成されると考えることができる。すなわち、

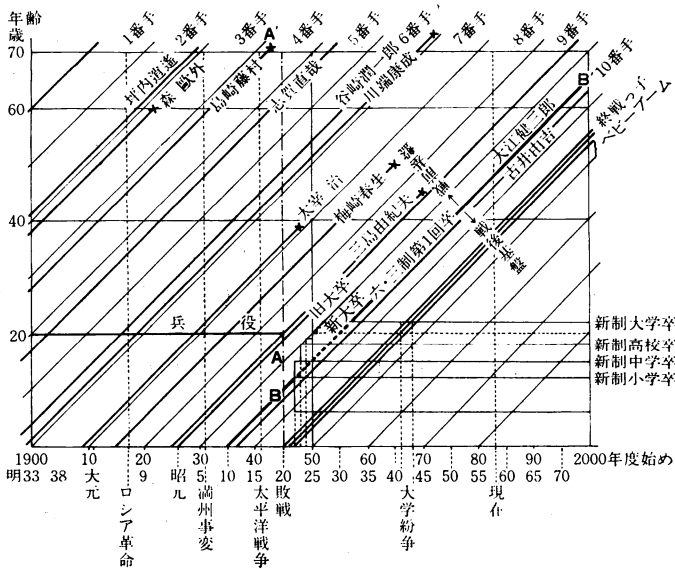
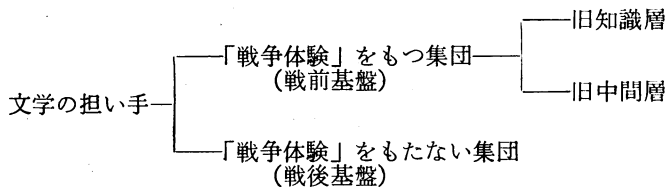


図 1 20 世紀後半における時代と文学の担い手



またそれを図示すれば図1のように「戦前」と「戦後」は AA' によってではなく BB' によって分けられる。

2-2 各基盤の消長

戦前の文学を担う基盤をつくっていた人々から、戦後の文学を担う人々への変化も、終戦の時に一挙に入れ替ってしまうということではもちろんない。戦後の時期もはじめの頃は、その社会的構成の大部分は戦前からの人々によって占められていた。しかし、戦前基盤を構成している人々は、戦後は再生産され補充されるわけではないから、戦前基盤の集団はしばらくは維持されていても次第に高齢化し、社会からリタイアし、失われてゆく。

これに対し「戦争体験」をもたない前節で戦後基盤と呼んだ人々は、新制中

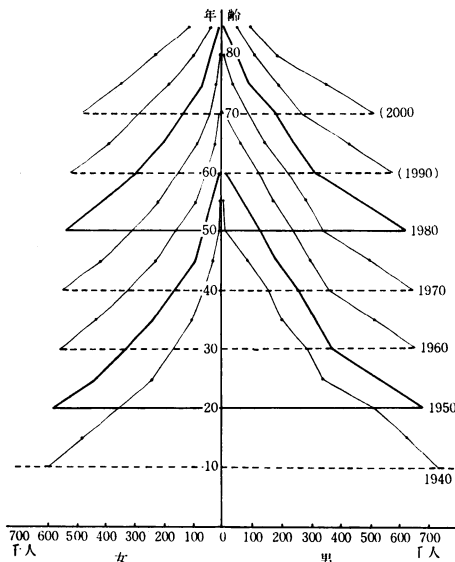
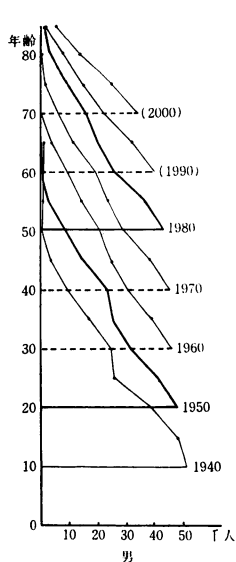


図2 旧知識層の年齢構成の変化

図3 旧中間層の年齢構成の変化

学卒業者がはじめて20歳の成年に達する1955年（昭和30年）以後毎年社会に送り出され、経済成長による進学率の増加と、いわゆるベビーブームによる同一年齢人口急増の波によって、高校卒以上の人々を対象としても毎年送り出される人々の数は急激に増大し、社会の中に蓄積して爆発的に拡大する集団を形成してゆく。その消長の状況は20世紀後半のこの期間の文学の場の変化の基礎となるものであるから、それぞれの変化をやや詳しく数量的に追ってみる。

図2、図3はそれぞれ旧知識層、および旧中間層のこの期間の変化を年齢別に示したものである。（データと計数処理については付録1参照）これらの図から明らかなように、戦前基盤の集団は戦後補充されないとはいっても、1980年（昭和55年）頃の最近に至るまで、ただ全体に高齢化するだけで、ほとんどその規模も年齢別構成も変えずに維持されてきている。すなわちこの部分だけに注目すれば今日もお「戦前」が続いて来ているのである。しかし今や一つの転換点であって、今後2000年へかけてはかなり急速に高年齢層から失われてゆく。生存でなく活動面からのリタイアを考慮すればこのことは一層顕著であろう。

他方図4は戦後基盤の拡大を示すもので、急激に拡大してゆくことは当然であるが、その年齢構成は、いわゆるベビーブームのピークを持つために拡大の

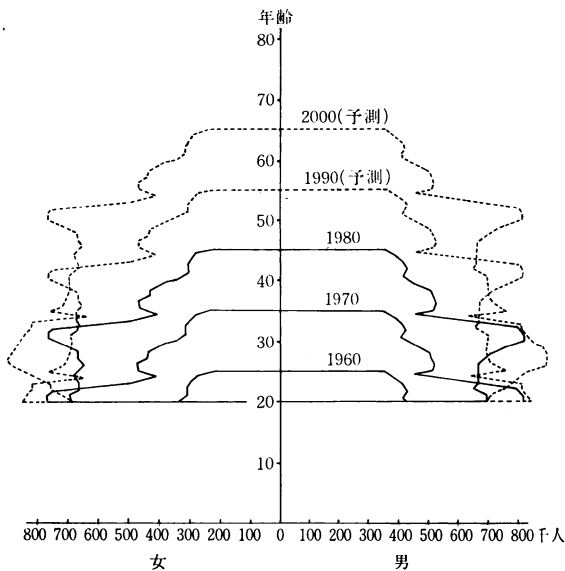


図4 高卒以上の戦後基盤の拡大

20世紀後半における文学基盤の変化の指標について（山中）

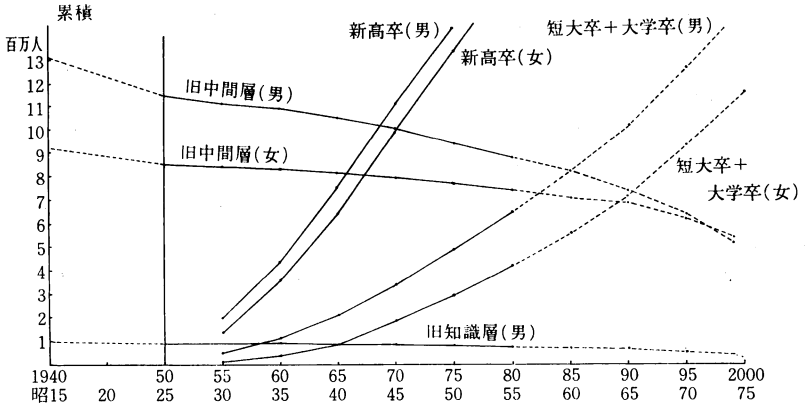


図5 20世紀後半における文学の担い手層の変化

波頭をもって、同じ急速な拡大といっても、戦前の旧中間層が加速度的に次第に拡大の速さを増し若年ほどますます拡大したのとは違った様相もっている。このことは今後読者層の重心の推移に微妙な影響を及ぼすであろうと考えられる。

図5は社会の中に維持、蓄積されてゆく総体としての戦前基盤と戦後基盤の消長と交替の状況を示したものである。図からわかるように1960年代の後半には男女とも新高卒卒以上の戦後基盤の人々が旧高等学校卒以上の旧中間層より多くなり、その頃女子の短大以上の卒業生数も旧知識層全体（男性だけから成る）より多くなる。また今後については、将来の大学短大への進学率をどのように考えるかでかなり大幅に違ってくるが、最近（1980年）までの傾向を延長し、かつての高校と同じ道を約30年のおくれで追うとすれば、短大卒以上の進学者も2000年にはほぼ1970年の高校卒の水準に達する。また極く最近は大学短大への進学率増加の鈍化の傾向が見られ、高校の場合のように男女の差が狭まらず、男子の短大、女子の四年制がそれ程拡大せずに別の傾向を示していることなどから、必しも高校卒のように100パーセント進学という方向に近づくのではなく、社会的にバランスする一定の率のレベルに漸近すると考えることもできる。どのレベルでバランスするかは明らかでないが最低としては今の水準で固定される場合である。実際は以上二つの両極端の間のどこかであろうから、仮りに今その二つの場合の中間をとって一つの目安とすれば、図6のようになり、これを用いて予測したものが図の点線で延長した部分である。これによれば1980年代の後半には、戦後基盤の短大卒が男女とも残存している旧中間層をも追い越す集団に成長する。

以上は潜在的な文学の担い手となる社会の三つの構成基盤のそれぞれの消長であるが、これがただちに実際の読者や文学の享受層の傾向に結びついているかどうか検証することはかなりむづかしい問題である。しかしこの内旧知識層や旧中間層については、すでに〔2〕で見たようにそれぞれの形成過程において、いわゆる文壇的文学と大衆文学の読者層にそれぞれ結びついていることが示されているので、この時期にも一応基本的にはその関係が維持されていると考えることができる。

旧知識層については、たとえばその中の特に選ばれた部分である日本文芸者

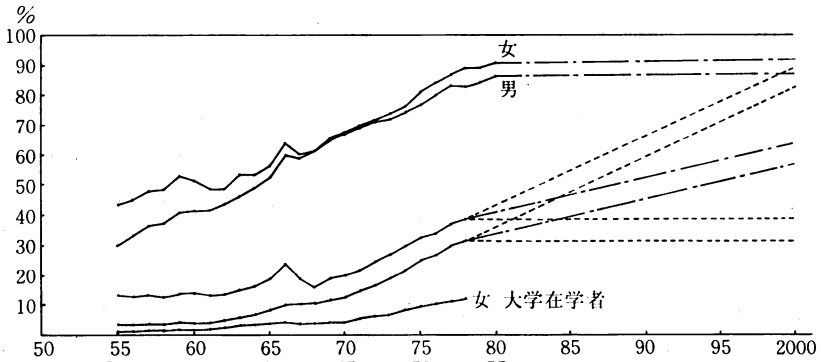


図6 当該年20歳の同一年齢人口中の学歴比

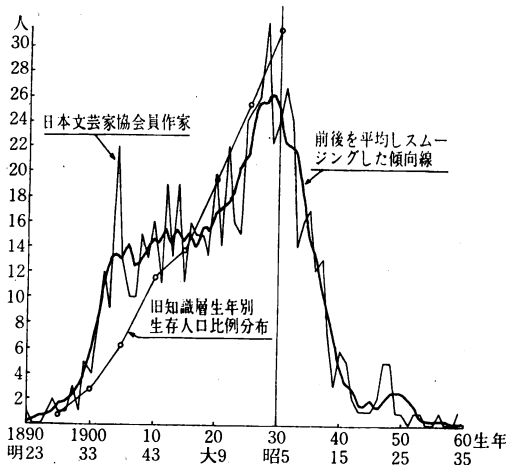


図7 日本文芸家協会会員作家数生年別分布 (1982年現在、文芸年鑑による)

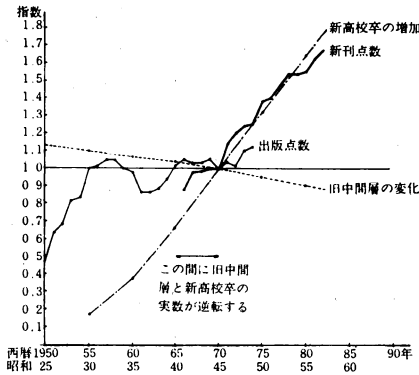


図8 文学関係出版点数の推移（出版年鑑より）

1970年前後で新刊書のための統計になっているので、1970年を1.00とした指数で示した。1965～70年は図4のように旧中間層と新高校卒が男女とも実数が逆転する時期に当たっている。そして1970年以前は旧中間層と、1970年以後は新高校卒と、変化の傾向がほぼ一致している。

協会会員の1980年における年齢分布が、図7のように旧知識層の年齢分布とかなりよく重なることから、それが母集団であることを間接的ながら推察せしめる。

旧中間層については、最近はその時代の変化につれていわゆる活字離れが生じているともいわれているが、もともとこの層では旧知識層のように活字文化と密着していたわけではなく、映画、音楽、演芸その他の大衆文化の一つとして大衆文学を担っていたのであって、或る程度の変化はあり得よう。新聞、雑誌の購読統計は年齢別にはなっていないから直接旧中間層と戦後基盤に対応させて比較できないが、それが図8のように戦後基盤集団のような爆発的増加でもなく、旧中間層だけのように一定でもないことは、両者がいずれも部分的に関与していることを間接的に示していると考えられる。

3. 言語・メディア等社会的変化への対応

文学の成立のためには、その担い手となる作家と読者のほかに、それら両者を結びつける言語と、出版などのメディアが必要であり、その変化はまた文学へも反映する。明治期において活版印刷といわゆる言文一致普通文の開発が近代文学の成立の重要な要因であったことは[1]で述べたし、また映画、ラジオ、レコード、グラビアそして高速輪転機による大量印刷などメディアの発達に中間層の基盤の上に大衆文化を育てたことも[2]で考察した。

戦後はこれらの要素にどのような変化があったであろうか、

敗戦による戦後社会への変革は、明治維新の「文明開化」にも勝る大きな社会全体の変革であった。それは空襲による都市の物理的破壊にとどまらず、戦前の体制や価値の崩壊によって、また進駐軍による外からの強力な政治的、文化的インパクトによってもたらされた「民主化」という「第2の文明開化」であった。またこの時期に続く1960年代を中心とする経済の急テンポな復興と驚異的な高度成長は、それ以前にはほとんど予想もされなかったような「豊かな社会」をもたらし、日本人の生活様式を一変させた。外国の占領軍によって上から与えられた「文明開化」や「民主化」がほんとうにその名のようなものであったか否か、また「豊かな社会」がほんとうに国民生活にとって豊かな内容であったか否か、そうした論議は別にして、とにかくこのように呼ばれる大きな社会全体の変化があったことは事実である。これらの変革が文学の場にもどのような変化を与えたか、それを考えるのには再び、前節で述べた三つの基盤の相異に注意し、それぞれへのインパクトに分解して個別に評価しなければならない。なぜなら、時代のヨコ時間（注1）的には同時に生じた変化も、受けとる側の経歴におけるタテ時間上の差によって、受けとめられた変化は決し

表1 国語改革とメディアの開発

	国 語 改 革	メ デ ィ ア 開 発
40年代	42. 12 文部省標準漢字 2,669 字発表 46. 3 アメリカ教育使節団報告（国語改革の必要） 11 当用漢字 1,850 字、現代かなづかい公布 47. 5 国語による憲法発効 48. 2 当用漢字音訓表公布 12 国立国語研究所設置	
50年代	51. 5 人名漢字別表公布 52. 4 公用文改善の通達 国語審議会「これからの敬語」決定 54. 12 「ローマ字のつづり方」公布	51. 7 民間ラジオ放送開始 53. 2 NHKテレビ放送開始 54. 4 東京・大阪、マイクロウェーブ回線完成
60年代		60. 9 NHKカラーテレビ放送開始 63. 11 通信衛星による日米テレビ中継
70年代	78. 4 常用漢字 1,900 字公布	78. 1 JIS漢字コード漢字 6,349 字制定 9 日本語ワードプロセッサ発表
		84. 1 放送衛星打ち上げ

て同じではないからである。

占領軍の「民主化」政策の一つとして、アメリカ教育使節団の報告に端を発する国語改革があった。その内容を論ずるのは本稿の目的ではないので表1に年表式に項目を掲げるとどめるが、要するに内容は

- (1) 「当用漢字」「現代かなづかい」「音訓」の制限
- (2) 「公用文」の標準化（憲法、法令の普通文口語化）、左横書きの普及
- (3) 新しい人間関係にもとづく敬語の用法

を定めたものであるが、この明治以来の画期的な改革も、旧知識層、旧中間層および戦後基盤の人々で受けとる意味は全く違っていた。

旧知識層にとっては、アメリカがもたらした「民主化」は横文字の書物を通して既に十分知っていたものであり、むしろ戦時中の軍による不合理な抑圧を除き近代化の本来の姿にもどすものと感ぜられたから、「何んでも書ける」ことになったに過ぎなかったし、国語改革も、その内容について様々な意見があるにしろ、すでに半世紀も前に言文一致普通文をつくり上げ練ってきた実績もっていたので、今さら大きなインパクトとはなり得なかった。

これに対し、旧中間層にとっては、敗戦に対しては何んの準備もなかったし、「民主化」は知識層にとっての明治維新の開国にも比すべき大きなインパクトであった。国語改革も法令をはじめとして、それまで一般的には閉ざされているに近かった様々な知的分野へのアプローチを開らいた意味は大きく、外国文化への直接の——横文字の書物を通してでない——接触とともに、旧知識層と旧中間層のあまりにも大きなギャップを埋めるのに相当程度役立ったと思われる。

また六・三制の新教育を受けた戦後基盤の人々にとっては、国語改革は改革ではなくて、それこそがいわばネイティブな母国語である。戦前基盤の人々と比べれば、そこには新しい言語文化の国への移民の一世と二世の違いがある。

以上のようにして同じ国語改革も、その影響は三つの社会構成集団によってそれぞれ受け止め方に違いがあり、それが前節で述べた各集団の消長によって社会全体への影響の重点の推移をもたらすのである。

「豊かな社会へ」の高度成長の時代における言語やコミュニケーションの分野での最も大きな変化はテレビという新しい強力なメディアの出現である。これもその発展を表1に同じく年表的に項目を挙げるにとどめるが、その影響を考えるためには、やはり前節の三つの集団に対して個別に考えねばならない。

旧知識層を中心とする文壇的文学にかかわる問題を考える限りは、テレビ文化の影響もまたほとんど考えなくてよさそうである。もっぱら活字による文芸

誌を媒体とするそのシステムは、直接にはほとんどそれによって変化しないからである。しかし旧中間層の大衆文学を考えると、これは [2] で述べたように映画、レコードなどを含む大衆文化の一つとしての大衆文学であるから、映像、カラー、音声、文字をインテグレートして茶の間にとどけるテレビは当然大きな影響を与える。少し誇張していえば、テレビは「真なるもの」「美しいもの」「楽しいもの」を写し出すすばらしい「神器」であって、映画の衰退と同じように、いわゆる活字離れも確かに一つの傾向であり、雑誌も月刊誌から週間誌に替り、グラフ、イラスト、劇画の拡大などテレビ文化に伴う変化も少くない。

しかしテレビ時代になって育った大部分の戦後基盤の人々にとっては、もはやテレビは「神器」などでなく、日常生活の当り前な一つのファシリティであって、本棚の一冊の本や湯湧しから出るお湯のような文化の一片に過ぎなくなっているかに見える。

以上国語改革とテレビ文化というこの期間の言語文化とメディアにおける二つの最も典型的な変化の例を見てきたのであるが、それらの変化は単にその要因の出現によって一般的に影響を与えるのでなしに、それを受けとめる三つの集団によってそれぞれ別の仕方を受けとめられ、それらの集団の消長によっても変化を受ける。したがって変化の指標を考えるには、変化要因 X は、その三つの構成集団への成分に分けて考え、これを受けとめる集団の量的消長との積の和によって指標づけることが考えられる。すなわち、

旧知識層の全体に占める率 $q_1(t)$

旧中間層の全体に占める率 $q_2(t)$

戦後基盤の全体に占める率 $p(t)$

とし、変化要因 X のそれぞれへの成分を X_1 , X_2 , X_3 とすると、変化の指標は

$$X(t) = X_1 \cdot q_1(t) + X_2 \cdot q_2(t) + X_3 \cdot p(t) \quad (1)$$

となる。

これは、20世紀前半を二重構造と把えたのにならっていえば、20世紀後半を3成分構造として把えることを示したものである。

ここでこの(1)の関係を考慮して、20世紀後半の今後について若干の予測を試みる。

1983年は国連の世界コミュニケーション年であるが今後2000年までの期間は、世界的に本格的な情報化時代の発展期を迎えると考えられており、日本は米国とともにその推進力となるとみられている。かつて高度成長時代の終末期に、世界の「賢人」——視野の広い専門家——を集めて『成長の限界』という

報告を発表したことで有名となったローマ・クラブ（注2）は、1982年の東京大会で「Information Technology and Civilization」の報告（注3）を提出し、情報技術の今後の文明へのインパクトを予測している。同報告によれば、そのインパクトを、

- ① 態様の融合
- ② コミュニティ・オブ・インタレストの増加と重要性
- ③ 文化へのインパクト

の3つの側面にまとめて記述している。

①は技術的、システムの統合化であり、②は従来のマスコミュニケーションによるワンパターン化した大衆社会に対して、多様なインタレスト毎の小コミュニティの集り——仮りに大衆社会に対して「小衆群社会」とでも呼んでおきたい——への変化、③はコンピュータ芸術などカルチャーへの直接のインパクトである。

これを以上検討してきた基盤の消長との関連で考えると、今後は戦後教育を受け、戦後社会の中に育った戦後基盤の人々によって成人のほとんどが占められる。この戦後基盤の人々は、旧知識層のように日本の近代化の各段階に応じ[1]、[2]で分析したようにはっきりと段階づけられた特性をもつエージグループではなく、また旧中間層のような大衆社会でもなく、個別化した多様な集団になっていて、基盤としても「小衆群社会化」の要素をもっている。個別のイヤホンで音楽を聞くラジカセ、ウォークマン、テレビをパーソナル化するビデオ、そしてパソコンの流行はその一例であり、基盤もメディアも「小衆群化」あるいはパーソナル化してゆくことが予想される。

4. 「戦後文学史」と基盤の関連

進行形で累加されてきた戦後文学も、1970年（昭和45年）頃からは一つの文学史としての整理がなされるようになってきた。（注4）それらの多くは、それぞれの時期に現れた作品、またはデビューした作家をグルーピングすることにより時代的な区分を行っている。たとえば「国文学」昭和48年6月臨時増刊号は「戦後文学史の構想」を特集し、

- (1) 占領下の文学（昭和20～26年）
- (2) 転換期の文学（昭和27～34年）
- (3) 高度成長下の文学（昭和35～45年）
- (4) 内向の世代（昭和46～年）

と区分している。この分類にコメントして小田切秀雄氏は、「戦後文学史の時代区分の問題」(法政大学文学部紀要第 19 号)(昭和 48 年)で、

- (1)' 戦後の文学の成立——戦後派を中心として——
- (2)' 朝鮮戦争下の文学——'第三の新人'その他——
- (3)' 高度成長のなかでの文学
- (4)' 内向の世代から

と把えることを提唱している。しかし時代区分のグルーピングの境界を多少変更したにしろ、私はこのように時間軸だけで分けずることには基本的な制約があると考え。なぜなら、[2]でも述べたように時間軸だけでは同時代の階層構成の差が把えられないし、また階層は時代毎に全部入れ替るのではなく二つの時代にまたがり継続しているからである。

そこで時間で区切るのではなく、文学基盤の変化に注目してこの時期の文学の変化を考えてみる。

まづ戦争直後のいわゆる「民主化」の時代は、戦時中のタブーが取り除かれたことにより旧知識層の人々が直ちに戦前からの活動を復活させた。したがってこの時期の文学とは、既に指摘されているように戦後新しく興ったものではなく、戦前の近代文学の本来の姿での復活、延長であり、したがって戦前既に一家をなした大作家の充実した作品はもちろん戦後はじめて知られるようになった「戦後派」も、紅野敏郎氏が戦前の同人誌の実証的研究から指摘(注 5)されているように、

「戦後はじめて花開いたというのではなく、戦前にすでに確乎としたものが築かれていた」ものであった。小田切氏も、

「戦後派は、昭和初年に戦争のために見はてぬ夢となったものをあらためて総合的に実現したという見方もここに生じる」と書かれている(注 6)

これに対し、外の世界から閉ざされていた旧中間層の人々にとっては、内の世界や価値観の崩壊は、敗戦による混乱、去脱という表現が誇張でない状況で、一つの文学の基盤となり得る準備ができていなかった。そして戦後基盤の人々はこの時期には未だ形成されていなかったから、以上の近代文学の復興、あるいは戦前基盤である「戦後派」を中心とするという把え方は、この時期に限っては階層分析的にもそれで尽されている。

しかし次の時期にはいると、もはや旧知識層を中心とする、いわゆる文壇の周辺だけを把えるのでは必しも十分ではなくなる。この頃になっても、文学の書き手である作家の側は旧知識層を中心とする一部の人々であることに変わり

ないが、その対象となる読み手は、旧知識層だけにとどまらなくなる。また戦前の旧中間層と旧知識層の間には読み手の質を隔てるあまりにも大きなギャップがあったが、民主化から復興、高度成長へと変化をとげた戦後の社会においては、この差は本質的なものでなく、ギャップは次第に狭められて来ており、中間小説、風俗小説、推理小説などまでずっと連なる全体の大きな文学需要を形成し、さまざまな作風の作家、さまざまなジャンルの作品が読まれる条件が成立するようになった。(注7) したがってこの時期の開始を劃する「第三の新人」といわれる人々だけでなく、戦前からの大家や戦後派も仕事を続けるし、女流作家の活動やかつての大衆作家の中からの中間小説、純文学的創作も出現する時代となった。この時代の新人達を「第三の新人」と抽象的な番号で呼び、それに続く人々も、小田切氏が適当な名前がつけられない(注7) というように多様化し、また「戦後派」のように「派」ではなく、「新人(たち)」と「人(たち)」と呼ばれるところにむしろこの時代の特徴がある。したがって私はこれをあまり細かくグルーピングせずに、むしろさまざまな作家が共存するところに時代の特徴をもとめる方が適当であると考ええる。

では1970年代以降はどうであろうか、2節で述べたように70年代あたりまではまだ戦前の旧知識層、旧中間層がほとんどそのまま維持されていた期間であって、したがって文学の場の状況も、戦前的な概念で把握される条件があった。しかしこの頃から以降になると、その基盤は急速に失われて行き、戦後基盤が主要な部分を占める時代となる。そこではいったいどのような変化が生じるのであろうか、私はここでは書き手と読み手の間も次第に接近して来ると考える。かつての俳優や歌手のスターが次第になくなり身近な「タレント」になったように、明治の「文豪」大正の「文士」昭和の「作家」はなくなり、シナリオ・ライター、ルポライター等々と似た「タレント」としての「ノベル・ライター」とでもいう読者にとって近い関係のものになるのではないかと考える。それは最近の文学賞やベストセラーがいわゆるタレントに与えられたという風潮によってではなくて、書き手と読み手の関係の基本的変化が生じてきつつあると考えるからである。社会全体が前節で述べたようにコミュニティ・オブ・インタレストの「小衆群社会」へ進むことが予測されるのであるから、私はこの関係は一層進むであろうと考える。1970年以降の「内向の世代」の出現は、私はその方向への一つの現れであり、小衆群社会の個室的な指向と関係するものではないかと考える。またこれが「世代」と呼ばれ、「派」でも「新人(たち)」でもないことに、戦前基盤から戦後基盤への基盤の交替が関与していると思われる。

以上のようにして私は、「戦後文学史」を(1)(2)(3)(4)のように、あるいは(1)'(2)'(3)'(4)'のように平面的に並べるのは適切ではなく、20世紀後半全体を大きく見渡して、「内向の世代」あたりを境とし、

前半期、1970年頃まで、戦前基盤を主とする文学、

後半期、1970年～2000年、戦後基盤を主とする文学

に大別し、前半はさらに戦後の近代文学復興期とその後の「拡大期」とでもいうべき時期に整理するのが妥当ではないかと考えるのである。

5. む す び

以上述べてきた20世紀半ばから今日までの文学基盤の変化の状況を要約すれば、

- (1) 戦後の文学の担い手は、大きく二つの基盤にわかれる。すなわち戦争と敗戦を体験した「戦前基盤」と、戦後の六三制新教育のもとに人間形成を行ってきた「戦後基盤」とであり、前者はさらに旧知識層と、大衆文化を担った旧中間層にわかれ、全体として三つの構成要素から成り立っている。
- (2) 旧知識層も旧中間層も1970年頃までは、ただ高齢化するだけでほとんどそのまま維持されているが、その頃から減じはじめ1980年を過ぎる今後はかなり急速に高齢部分から失われてゆく。
- (3) 戦後基盤は、ベビーブームの波頭もあって急激に拡大し、1965年頃には新高卒以上だけでも旧中間層を上回って逆転し、1985年を過ぎれば短大卒以上さえも旧中間層を上回る。
- (4) いわゆる「民主化」とされる戦後の改革も、「豊かな社会」への生活の変容も、その受けとめ方は前記三つの構成要素によって異なり、それらの消長によって全体としての影響の表れ方も変化する。
- (5) その結果、この期間の前半は主として戦前基盤の上での文学の変化によって代表されるが、半ばから今後にかけては主として戦後基盤の上で展開される変化となる。前者では旧知識層による近代文学の復興にはじまり、旧知識層と旧中間層の接近融合による拡大した基盤の上での多くの文学の共存がみられる。
- (6) さらに今後2000年までの変化の予測を行えば、今後は戦後基盤の上での変化という今までと異なる時代にはいり、ライターとリーダーが接近し共通のインタレストによる無数の小文学コミュニティへ分散化してゆく方向に向かうのではないかと考えられる。

以上が本稿の結論であるが、はじめに述べたように、本稿は明治期の [1], 20世紀前半の [2] に続く 20 世紀後半を扱ってきたものであるので、ここで [1], [2] を含めて、明治からの日本の近代文学の全体の基盤の変化を要約すれば、

- (7) 明治期は、近代化を担うエリート知識層により、明治 20 年 (1887 年) から明治 40 年 (1907 年) にかけて近代文学が形成された。
- (8) 20 世紀にはいと知識層による近代文学の安定的洗練深化のほか、教養における中間層が加速度的に増大し、それを基盤とする大衆文学が加わり、全体として二重構造となった。
- (9) そして 20 世紀後半は、旧知識層、旧中間層、戦後基盤の三成分構成で、第三四半世紀は旧知識層を主とする近代文学の復活と、知識層と中間層の接近融合による拡大した基盤の上での発展が見られ、21 世紀に至る第四四半世紀には、(6) で述べた戦後基盤の上における新しい時代を迎える。

と要約することができる。

終りに本稿でも、[2] と同様計数の処理に国文学研究資料館の電算機システムおよびソフトウェア SAS を利用したことを附記する。

注

1) タテ時間, ヨコ時間:

同じ 1945 年の敗戦という事件についても、それを国民学校の疎開学童として迎えるのと、20 歳代の兵士として戦場で迎えるのと、30 歳代の人生の半ばですべてを失う形で迎えるのと、或いは 40 歳代で迎えるのでは、責任も影響も全く異なる。この人生の経験上の区別を示すために、時代の進行を示す時間を X 軸に、人生の歩みを示す時間を Y 軸にとり、この 2 次元の時間平面の上に事件をプロットする。これは多時間論的記述の一つであり [1], [2] で実際に行ってその有効性を述べた。この時間平面の X 軸を時代のヨコ時間、Y 軸を人生のタテ時間と私は呼んでいる。図 1 はこの時間平面で画かれている。

2) ローマ・クラブ:

イタリアのアウレリオ・ベッチェイ博士の提唱により 1968 年ローマで最初の研究会を開いた。世界の政、財、学界の有識者による国際的未來研究団体、1970 年スイスの法人として設立され恒常的機関となった。日本には日本委員会が置かれている。

3) 'Information Technology and Civilization'

ローマ・クラブ日本委員会の発意により、猪瀬博 (東京大学工学部教授)、ジョン R. ビアース (カリフォルニア工科大学名誉教授) 両氏の共同研究として準備され、1982 年のローマクラブ東京大会で討論されまとめられた情報技術の未來文明へのインパクトに関する報告である。1983 年 11 月雑誌「サイエンス」の別冊として邦訳

が出されている。

- 4) 戦後文学史： 参考文献（10～18）
- 5) 参考文献（19）
- 7) たとえば新聞小説について参考文献（17）がある
- 8) 参考文献（14）

主な参考文献

- 1) 『日本統計年鑑』総理府統計局（1982）
- 2) 文部省『日本の教育統計』（昭和23～40年）（昭和41年）
- 3) 文部省『わが国の教育のあゆみと今後の課題』大蔵省印刷局（昭和44年）
- 4) 文部省『我が国の教育水準』大蔵省印刷局（昭和56年）
- 5) 日本文芸家協会『文芸年鑑』新潮社（昭和58年）
- 6) 『出版年鑑』出版ニュース社（1983年）
- 7) 西尾実・久松潜一『国語国字教育史料総覧』国語教育研究会（昭和44年）
- 8) 北村日出夫・中野収編『日本のテレビ』有斐閣選書（昭和58年）
- 9) 猪瀬博, ジョン・R・ピアース『情報技術と文明』日経サイエンス社（1983年）
- 10) 中村光夫『日本の現代小説』岩波新書（1969年）
- 11) 大久保典夫「戦後文学史の方法と課題」解釈と鑑賞35巻1月（昭和45年）
- 12) 吉田熙生「戦後の文学」国文学16巻16号（昭和46年）
- 13) 「戦後文学史の構想」国文学18巻8号（6月臨時増刊号）（昭和48年）
- 14) 小田切秀雄「戦後文学史の時代区分の問題」法政大学文学部紀要第19号（昭和48年）
- 15) 長谷川泉『戦後文学史』明治書院（昭和49年）
- 16) 『シンポジウム日本文学19 戦後文学』学生社（昭和52年）
- 17) 武田勝彦「戦後新聞小説と社会背景」解釈と鑑賞42巻15号（昭和52年）
- 18) 古林尚・佐藤勝『戦後の文学』有斐閣選書（昭和53年）
- 19) 紅野敏郎『昭和文学の水脈』講談社（昭和57年）
- 20) 山中光一「明治期における文学基盤の変化の指標について」国文学研究資料館紀要第6号（1980年）
- 21) 山中光一「20世紀前半における文学基盤の指標について」国文学研究資料館紀要第8号（1982年）

（付）

「予測」についてのコメント

最も自由であり創造的であることを不可欠とする文学に関して、「予測」を行うなどということは不可能でもあるし邪道であるという考え方がむしろ普通ではないかと思われる。

しかしここで行う予測はもちろん個々の作家や作品について予測するものではないし、また今後の創作活動に何らかの影響を与えようとするものでもない。それでは全く無駄なことではないかといえれば私はそのようには考えない。

ここで行う予測は研究の一つの方法としての予測であって、研究方法としての予測は、本文に掲げた日蝕計算や地震予知ばかりでなく、経済学や教育学など社会科学においても珍しいことではないし、実は文学研究においても、過去に向っての「予測」を行うことは例のないことではない。たとえば近世の出版文化についても実証データが得られない面がたくさんあり、それをどう克服するか「文学」Vol. 19 (1981年11号)の座談会で話題となっているが、そこでも何らかの「予測」をしなければならないのである。

過去は、事実は確定しているはずであるが、その資料やデータが失われてしまっているために手持ちの資料によって「予測」しなければならないのである。その場合その予測を実証するデータが今後発見・発掘されるかどうかはさ程確かではない。これに対し将来の予測は、たしかに今は事実すら確定していないが、しかしそれはやがて確実に事実と比較検証することが可能となるものである。事実と比較検証できるということは研究にとってはきわめて強力な方法であって、それにより理解を深め、方法を改善し、鍛えることができる。その理解や方法は、そのまま直ちに他に応用できないにしても、過去の理解や研究にも有力な参考になると思われる。

付 録

(1) 旧知識層、旧中間層の変化の推定

$t = 20$ 世紀の年数 (西暦の下2桁)

$a =$ 満年齢

$j = 1$ は男, $j = 2$ は女

$Q_{1j}(t, a) = t$ 年, a 歳の旧知識層 (高等教育卒) の数

$Q_{2j}(t, a) = t$ 年, a 歳の旧中間層 (高等小学校以上卒) の数

$d_j(t, a) = t$ 年, a 歳の年間の死亡率

$R_j(t_1, t_2; a_1, a_2) = t_1$ 年, a_1 歳の者が, t_2 年, a_2 歳まで生存する生存率とする

$$R_j(t, t+1; a, a+1) = 1 - d_j(t, a) \quad (1)$$

$$Q_{1j}(t_2, a_2) = Q_{1j}(t_1, a_1) \cdot R_j(t_1, t_2; a_1, a_2) \quad (2)$$

これにより戦前の卒業数 ([1], [2]の付表に示した) から戦後の生存数を求めるのであるが、1940 (昭和15)年～1950 (昭和25)年の間は戦争のため統計が不備であり、かつ、20代の男子の死亡率が異常に高くなっているので、1940～1950、および1950～1955年の間は、年齢別人口の差から生存率を求めた。すなわち

$P_j(t, a) = t$ 年 a 歳の人口

を用いて

$$R_j(40, 50; a, a+10) = P_j(50, a+10) / P_j(40, a) \quad (3)$$

$$R_j(50, 55; a, a+5) = P_j(55, a+5) / P_j(50, a) \quad (4)$$

この期間を除けば死亡率は t, a , によりさ程大きく変化しないので、5年毎の国勢調査の5歳間隔の年齢別死亡データを用いて

$$R_j(t, t+5; a+5) = (1-d_j(t, a))^5 \quad (5)$$

により求めた。

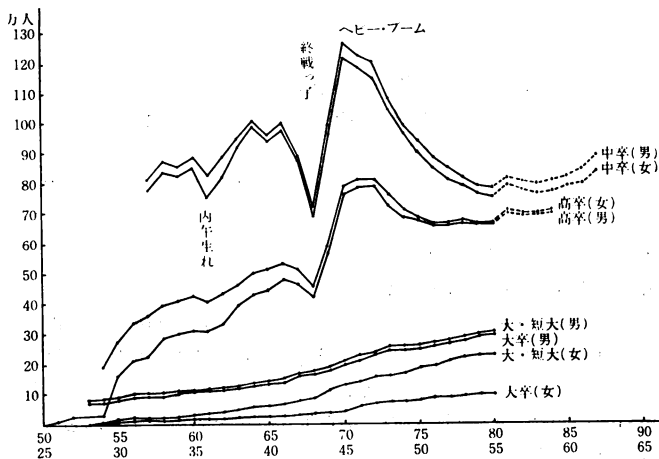
[2] で述べたように、戦前は人口も、進学率も直線的に増加したので、5年間隔のデータでも大要は把握される。ただし、統計年鑑の10歳、15歳、20歳……という5歳間隔の死亡率データを用いたので、卒業年齢とあわせるために相当年だけ年次をずらせて卒業数をとった。すなわち旧知識層では浪人しなければ23歳大卒だから $t-3$ 年に20歳として、また、旧中間層では $t+6$ 年20歳としてそこから生存数を求めた。

t 年における総数は、以上のように年齢別に求めたものを t 年毎に総和した

$$Q_{ij}(t) = \sum_a Q_{ij}(t, a)$$

(2) 戦後基盤の推定

戦後は終戦の落ち込みと、その後のベビーブームのために付図-1のように年毎の実数の変動がはげしく [2] で戦前について行ったような簡単な式で近似することができない、そのかわり年毎の統計データは得易いので、各年齢毎に (1), (2) 式に従って数値的に追って行く、(死亡率は大きく変動しないので5年毎の国勢調査データでもよい)



付図-1 大卒年齢相等の最終学歴別人口